

大江健三郎著

『新しい人よ
眼ざめよ』

(講談社)

中村 弓子

本書は昨年度の大佛次郎賞を受賞した話題作であるが、著者みずからが、この作品の動機を次のように説明している。

「障害を持つ長男との共生と、ブレイクの詩を読むことで喚起される思いをないあわせて、僕は一連の短篇を書いてきた。この六月の誕生日で二十歳になる息子に向け



て、われわれの、妻と弟妹とを加えてわれわれの、これまでの日々と明日への、総体を展望することに動機はあった。こうした動機をもって書かれた本書はまた同時に、障害児「イーヨー」をめぐる状況を通しての過去二十年間の日本の思想的状況の回顧ともなっている。

しかし著者はイーヨーとの共生の意味を読み取るために、なぜブレイクの子言詩に訴えることになったのだろうか？ それは障害児の存在が、人間とは何かという根本的問いを絶えず投げかけずにはいないからであり、またブレイクの言葉にあるように、真の「無垢（イノチ）（無知ではなく）は、知恵とともに住んでいる」からである。それゆえにイーヨーの行動、言葉のひとつひとつが一種の象徴的意味合いを持つてくる。本書でイーヨーの言葉がすべてゴシックで書かれているのは単なる偶然ではない。その象徴的意味合いを著者はひとつひとつブレイクに訴えて解き明かそうとしている。その試みの注意深さ、丁寧さの中に、著者の父親としての愛情が溢れ出ている。

イーヨーとの共生の意味の読み取りは、複雑なひとつ

の体系を構成しているのであるが、その核心をなすものは次のこの上なく美しいエピソードの中に開示されている。

長野のある養護学校がクリスマス会上演する劇の台本を著者に、その中の歌の作曲をイーヨーに依頼してきた。（イーヨーは作曲に天与の才能を示したのである。）著者はガリバー物語のパロディーを考え、小さな人たちの二つの国のどちらの権力者の言うことにも左右されずに、小さな人たちの味方として、戦争の道具となることを拒否するガリバーの中に、小さな人＝障害児の生きてゆける社会を守る政治のイメージを托した。そしてイーヨーはその歌を作曲し、上演日にはプロンプターとしてガリバーの大きな足のはりぼての中に入っていた。すべてが終り、担当の先生が「作曲者を紹介します。さあ出て来て下さい」と言うと、イーヨーは意外にも「僕は足のなかにいようと思いません。ありがとうございました！」と答え、足の中に入ったまま「きよし、この夜」を父兄もいっしょに歌うことを提案する。大きな拍手の

中、はりぼての裏側からあてられた照明の中に、手を振って歌い続けるイーヨーの影法師が浮び上る……。

そのイーヨーの姿は著者の目にブレイクの予言詩「ミルトン」の中の、人間の救済の実現のために天から地上に降ったミルトンの霊がブレイクの肉体に入りこむ、その箇所と重なって見えてくる。「私は見た、天頂から落ちる星のように垂直にくだってくる、つばめのようにあるいはあまつばめのように素早く／そして私の足の跗骨うしほねのところ降りそこから入りこんだ。」ガリバーの足のはりぼてを、イーヨーが「立派な足ですね！ これはパパの足でしょうか？」と言っていたこともあり、はりぼての足に入ったままのイーヨーの姿は、ブレイクの予言詩を媒介に、著者にとって本質的にイーヨーが何者であるかを開示することになった。イーヨーはいわば「彼岸からの使者」なのである。それはまたイーヨーにとっての著者が何者であるかをも開示することにもなった。「これは父親のためのイーヨーによる定義だ」と感じながら、はりぼての足の中のイーヨーに著者は拍手を送る。

家族全員が協力した劇の成功のその喜びの高揚の中でのこの啓示は読む者に深い感動を与える。

「定義」、それは存在の本質的なアイデンティティを表現することであり、はりぼての足の中に入ったままのイーヨーは、その姿そのものによってこの上ない自分の「定義」をし、そしてその自分に対する父親の「定義」づけをも果したのだった。著者は、イーヨーのような障害児たちが生きてゆくのを助けるために、このようなできるだけ具体的な形の「定義」を世界、社会、人間に關してしてやりたいと考えた。それが本書を書くもう一つの動機となっている。

著者はある講演の中で次のように言っている。「障害児学級の息子の同級生たちのために、そのような子供たちが将来この世界で生きてゆくためのハンドブックというものを書きたいと私は考えるようになりました。そのような障害児学級の子供に理解できる言葉で、この世界、社会、人間とはどういうものかをつたえ、それでは元氣を出してこれらの点に氣をつけて生きていってく

れ、といたいと考えたのです。」このような世界の定義の試みは、また作家としての著者に、自分自身を洗い直し、まずは自分自身に切実な要素となっている定義がどのような経験を介して自分のものとなったかを問い直すことを促す。そのような原体験の洗い直しの試みはこの本の中でもなされ、それは「作家」大江健三郎の試みとして非常に新鮮な密度を持った部分になりえている。そのような「作家」としての定義の試みが、イーヨーたちのためのハンドブックに用いられる定義となるには、まだまだ大きな距離があるように思われるが、しかしイーヨーの存在こそが著者にそのような一歩を踏み出させたのは確かなことであるし、それがいつの日かハンドブックの定義へと連なっていくことを希望することもできるのだ。

そもそも障害児たちが生きてゆくためのハンドブックとしての定義集という著者の着想の出発点にあったのは憲法だった。社会はいかなるものでなければならぬかという定義集であり、またそれはイーヨーのような人間

が安心して生きてゆける社会の定義でなければならぬ。その定義集は本来ならば、戦後まもなくの憲法の出現に少年時の著者が受けた強い感動を反映して、ちょうどブレイクが独立宣言の思想を予言詩「アメリカ」で歌ったように歌い上げるものだったかもしれない。しかし「当の憲法下の現実そのものが簡潔、正確かつ喚起的な言葉で書くことを不可能たらしめている。」そしてそこにイーヨーの育った二十年間の日本の右翼から左翼に至る思想的状況が敵として存在している。特に核兵器の状況をめぐって著者は、「個としての暴力・情念のゆきつくところを身にしみて知る人間が、世界規模の暴力・情念の暴発に対して抗議しよう」とするそのような取り組み方に共感を示しつつ、核の時代におけるイーヨーとその弟のような新しい世代の人間が、自分の置かれた場の「傭兵」となってしまう人間たち、「永久に知の戦いを抑圧して、肉の戦いを永びかしめる者」である「傭兵たち」に対抗して生きてゆくことを祈願しつつこの本を終えている。

さて、「同時代の政治問題、国際問題をモチーフとしながらも、固有の神話世界をくぐりぬけさせて、時をこえた表現とした」ブレイクにならない、この本の最終部分の核の新時代に眼ざめるべき「新しい人」のイメージには、ブレイクの詩「ジェルサレム」のキリストとアルピオンの対話の中に展開する死と復活のテーマが重ねられている。それは著者とイーヨーという個人の死と復活でもあり、より大きなスケールでは綿綿と続く人類の死と復活といういわば終末論的ヴィジョンをも意味するのであろう。そしてキリスト教において死と復活が、キリストによる「罪のゆるし」によってはじめて成熟するものであるように、著者も、核の状況と根本においてつながるような個の規模での暴力、情念が自分の中に入ごめいているのを不安をもって見定め、「まだ無垢の力をもちこたえている」イーヨーの中にもその前兆が表われつつあるのを恐れながら、しかし両者の共生の究極に、死と復活に伴う「罪のゆるし」の恩寵のようなものがあるのを感じる、という。しかし、そもそもイーヨーとの共生

の意味を読み取るために終始著者が訴えているのはブレイクにおける神そのものではなく、その神から派生する宇宙論的な力をあらわす神人たちの神話的世界である。そのような世界における恩寵の予感はいったどこへつながっていくものだろうか。そしてそれは核時代の現実世界においてどのように働くものなのだろうか。この点は本書において興味深い未知数の要素として残っている。

さて最後につけ加えるならば、この本の構造は一昨年同じこの緑蔭図書紹介で取り上げたトゥルニエの『フライデーあるいは太平洋の冥界』と非常に似ていることに気がつく。大江氏にとってのイーヨーはいわばロビンソン・クルーソーにとってのフライデーであり、その出会いを通じてロビンソンが認識というものの見直しをしていったように、大江氏も自分にとっての「定義」をし直してゆく。その見直しるとき参照したのはロビンソンにとっては聖書だったが、それは大江氏にとってはブレイクである。大江氏自身がこのトゥルニエの本を「野生の

思考」についての小説として推薦しているが、自身のブ
レークハイクーヨー経験との深い類縁を感じて惹きつけら
れたところも大きかったはずである。しかし文明の思考
と野性の思考を対比した『フライデー』と比べてこの本
はより形而上的であると同時により社会的でもある。そ
して何よりも大江氏のイーヨーに対するまなざしの親し
さ、暖かさはフライデーに対するロビンソンのまなざし
とは比較にならない。

さて、本書を読んだあとに、非常に抒情的な筆致なが

ら本書と通うものを持つもう一冊の本、国木田独歩『春
の鳥』を読んでみたらどうだろうか。ここに登場する
「六さん」ももう一人の「彼岸からの使者」である。そ
して春の鳥とひとつになって天守閣から飛ぶ「六さん」
には、死の時がいたった際に、魂が首尾よく肉体から脱
け出していけるように、坂道でグライダー滑空のように
地面を走っては空中に飛びあがる「魂の離陸」の練習を
した大江少年の姿とも重なってくるのである。

(お茶の水女子大学)

